

書架における情報探索行動の分析

吉田早貴子

情報収集の際には各情報源の特性を踏まえつつ、複数の情報源から情報を得ることが重要である。それに対して、現在活用されている情報源はインターネット上のものに偏り、特に図書などは活用されない傾向にある。このことから、図書を活用する時に何かしらの困難があると考えられる。そのため、本研究では図書を活用する場として「図書館の書架」に注目し、図書館の書架で情報探索をする際の困難の克服を目指す。しかし、図書館の書架での情報探索行動については多く研究されておらず、その実態は明らかにされていない。そこで、本研究は図書館の書架での情報探索行動を分析し、その特徴や探索時の困難を明らかにすることを目的とする。

本研究では、実験協力者に「メディア・リテラシー」に関するレポート課題を提示した。実験協力者は、課題の参考資料を探す設定で図書館の書架で情報探索をした。また、課題に関する図書を1冊提示し、実験協力者が希望した場合にはその排架場所へ実験実施者が案内した。書架での行動に注目するため、WebブラウザやOPACの利用を禁止した。実験協力者は知識情報・図書館学類の学生であり、2人1組で参加が4組、1人で参加が4人の合計8組12人である。探索の様子は録画し、探索後にはインタビューを行って探索時の行動の意図等を聞き取った。

実験の結果、以下のことが明らかとなった。

1. 図書を選ぶ際に狭いキーワードをもとに探索をしていた。具体的には、レポート課題から連想した「メディア」「リテラシー」の2つのキーワードがタイトルに含まれる図書を、探索中に多く手に取っていた。他のキーワードが含まれる図書はほとんど手に取らなかった。
2. 図書の外観によって図書の新しさを判断してしていた。実験協力者は新しい図書を優先的に手に取る傾向があったが、多くの場合、図書の外観から新しさを判断し、新しいと判断した図書の奥付を確認した協力者はほとんどいなかった。
3. 図書の排架場所を特定する際に、図書館の空間とNDCを関連付けられていなかった。ヒントとなる図書の排架場所を探索する行動の分析から、図書の排架場所を特定する際には館内表示のNDCの変化に注目することが有効であることが分かったが、その変化に注目できた実験協力者は少なかった。
4. 主題と関連するNDCに基づく分類名が判断できず、探索する書架を定めることができなかった。図書館内で探索する書架を探す時、館内表示の分類名を適宜確認する行動が多く見られた。しかし、「メディア・リテラシー」等の探索の主題と、館内表示の分類名の関連が判断できず、探索を行う書架を定めることができなかった。

本研究より、実際の図書館における情報探索行動の特性や課題の一部が明らかとなった。しかし、本研究は知識情報・図書館学類の学生を対象としたため、NDCや図書館の配架の知識が探索に影響を与えた可能性がある。そのため、今後の課題として、他学類の学生等を対象として、図書館に関する知識が少ない場合の図書館内の探索を対象とする包括的な分析が必要である。

(指導教員 松村敦)